資 源 評 価 調 査 事 業

藤 田 弘 一・久 野 正 博・中 西 尚 文・沖　大 樹・山 田 浩 且
徳 沢 秀 渡[*1]・瀬 古 慶 子[*2]

目　的

我が国周辺における重要漁業資源の資源量評価，動向の予測，最適管理手法の検討のために必要な基礎資料を収集するため，水産庁「資源評価調査事業実施要領」に基づく独立行政法人水産総合研究センターの「資源評価再委託調査実施要領」に沿って調査を実施する。調査結果は地先への来遊資源動向予測や資源状態の把握に資すると共に，全国的な資源量評価を行うために独立行政法人水産総合研究センターに報告する。

方　法

全国では，我が国周辺水域の42魚種82系群について資源評価が行われたが，本県が対象としたのはマイワシ太平洋系群，カタクチイワシ太平洋系群，ウルメイワシ太平洋南部系群，マサバ太平洋系群，ゴマサバ太平洋系群，マアジ太平洋系群，スルメイカ冬季発生系群，マダイ太平洋中部系群，ヒラメ太平洋中部系群，トラフグ太平洋系群，ブリ太平洋系群，マアナゴ伊勢・三河湾小型底曳網漁獲対象，シャコ伊勢・三河湾系群の13魚種13系群である。また，ブリ幼魚（モジャコ）については，漁場一斉調査として調査船による流れ藻への付随状況の調査を４月から５月に実施した。イカナゴ伊勢・三河湾系群については沿岸資源動向調査として産卵親魚量や当歳魚の加入量推定を行うための調査を実施した。

１．生物情報収集調査

県下主要水揚げ港（白子・白塚・安乗・波切・片田・和具・贄浦・奈屋浦・錦・紀伊長島・九木の11港）において，日別，漁業種類別，魚種別漁獲量を調べると共に，水揚げされた調査対象魚種について魚体測定を行い，漁獲物の生物特性を把握した。また，市場において漁獲時の漁場位置，海況などについて，聞き取りを行い,漁場別漁獲動向を把握した。

２．沖合海洋観測等調査

毎月１回，伊勢湾および熊野灘の所定の定点（計12定点）において改良型ノルパックネットの鉛直曳きを行い，調査対象種の卵稚仔出現動向を把握した。また，新規加入量把握のためボンゴネット,表中層トロールネット（LCネット），アイザックキットネット（IKMT）等による稚魚・小型魚の採集を実施した。

結　果

資源量評価並びに動向予測等については，独立行政法人水産総合研究センターによってとりまとめられるため，ここでは本県が委託を受けている中から主要な６魚種(マイワシ・カタクチイワシ・ウルメイワシ・サバ類・マアジ・スルメイカ）の本県沿岸域における本年度の漁況特性についてとりまとめる。栽培漁業対象種（マダイ，ヒラメ，トラフグ），ブリ（モジャコ，イナダ，ワラサ，ブリ），資源回復計画対象種（マアナゴ,シャコ），沿岸資源動向調査対象種（イカナゴ）については，別途報告されるのでここでは省略する。なお，これらの結果は，水産庁「資源評価に関するホームページ」http://abchan.job.affrc.go.jpにおいて逐次情報が更新されて公開されるようになっている。

１．マイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2002年度（平成14年度）の中型まき網によるマイワシの漁獲量は948トンと過去最低であった。今期は前年夏季に見られた当歳魚(被鱗体長10cm前後)の特異的な漁獲も無く，冬・春季大羽群（被鱗体長19～22cm）の来遊量も少なくほとんど漁獲が無かった。10月下旬と11月中旬には，ある程度まとまった漁獲が見られ，11月中旬には冬季に来遊する大羽群（被鱗体長20cm前後）の漁獲が一時見られたが継続せず，被鱗体長15cm前後の当歳魚がわずかに漁獲される程度であった。

一方，伊勢湾におけるバッチ網漁は７月12日に解禁されたが，12月末までの伊勢湾主要２港（白子港・白塚港）におけるマイワシ漁獲量は皆無であった。前年は９月を中心に近年ではめずらしく比較的まとまった当歳魚の漁

[*1]三重県尾鷲栽培漁業センター　[*2]三重県栽培漁業センター

獲があった（777トン）。漁獲が無かったのは近年では1992年以来である。

２．カタクチイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2002年度（平成14年度）の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は13,929トンで，マイワシとは対照的に過去最高であった。近年熊野灘では冬季の産卵親魚群（成魚大型群）が高い水準で来遊し，前年度末の２月から漁獲が見られた。この魚群は継続して分布し，マイワシ，マアジ，サバ類などの漁獲対象魚が少ないこともあり，８月まで水揚げが続いた。漁獲物は体長11～14cmの成魚群が主体であった。その後，年が明けて１月中旬以降，体長10～14cmの成魚群を主体にまとまった漁獲が続いた。熊野灘におけるまき網のカタクチイワシ漁は，例年，２～３月頃に１歳魚を対象として行われ，４～６月は，マアジ，サバ類に漁獲努力が向けられることもあり，漁獲は少ない傾向にあった。しかし，前年からマアジ，サバ類の来遊が減少し，カタクチイワシの魚影が濃いため，これを漁獲することによって水揚げ量は多くなったものと考えられる。

一方，2002年７月12日の解禁から12月末までの伊勢湾主要２港（白子港・白塚港）におけるカタクチイワシ漁獲量は7,714トンで，近年では1999年（16,303トン），1996年（13,275トン），2001年（9,413トン）に次ぐ高水準であった。2000年以降，夏漁は豊漁で推移するものの，秋漁は一転して不漁に終わる漁況が続いている。今期も類似した傾向を示し，10月以降は漁況が急激に低調となった。11月にカタクチシラス，それに続くカエリがややまとまって漁獲されたが，例年みられる未成魚～成魚の漁獲は少なく，その後年末まで低調に推移した。７月には体長７～９cmの未成魚，成魚，８月には10～11cmの成魚，９月には８～12cmの未成魚，成魚，10月には７cm前後の未成魚および10cm前後の成魚，11月には９～10cmの成魚，12月には７～８cmの未成魚および９～10cmの成魚が漁獲主体となった。

３．ウルメイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・錦・紀伊長島）における2002年度（平成14年度）の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は591トンで，過去最高であった前年度の1,028トンの57%であった。月別で漁獲が多かったのは８月の173トン，11月の184トンであった。今期は例年よりもやや遅れて６月頃から沿岸での定置網で当歳魚の入網が見られた。まき網では９月～10月には被鱗体長９～13cmのものと14～18cmのものとが漁獲されていたが，11月に入り15～17cmのものが主体となって漁獲された。

４．サバ類

熊野灘主要港（奈屋浦，贄浦，錦，紀伊長島）における2002年度（平成14年度）の中型まき網によるサバ類の漁獲量は14,753トンで前年度の5,557トンから大幅に増加した。尾叉長組成の推移等から判断すると，６～７月の漁獲の主体はゴマサバ１歳魚（2001年級群，尾叉長28～33cm）で，ゴマサバ２歳以上の群（尾叉長33cm以上）も若干混獲された。その後８月になって漁獲は急減した。９月以降は当歳群（2002年級群，尾叉長20～26cm）のまとまった漁獲が見られ，低調で経過した前年を上回った。奈屋浦漁港でのサバ類全体に占めるゴマサバの混獲比は2002年度漁期全体で96.4%であった。マサバについては全体の3.6%であり，７月に227トンの漁獲が見られた程度であり，散発的な漁獲に終始した。

５．マアジ

2002年度（平成14年度）における熊野灘主要港（奈屋浦，贄浦，錦，紀伊長島）の中型まき網によるマアジの漁獲量は1,688トンで，前年度1,772トンとほぼ同水準の漁獲量であった。この結果,1992年以降で最高の値となった2000年度の5,277トンから大きく減少した状態が２年続いたことになった。漁獲の主体は１歳魚（尾叉長20～25cm）及び当歳魚（尾叉長12～18cm）で，１歳魚の来遊量は前年同様少なく，４月以降低調な漁獲に終始した。７月以降はそれまでの定置網に加えてまき網漁業へも当歳群の加入が始まった。当歳魚の来遊量は定置網では前年並かやや下回る程度，中型まき網では前年並であった。このため全体として，秋季の漁獲は前年同様に低調となった。

６．スルメイカ

和具港（県下最大のスルメイカ水揚げ港）における2002年６～９月の一本釣りによるスルメイカの漁獲量は132トンで，前年の139トンとほぼ同じであった。和具港における今期の水揚げは例年より１月遅い６月からであったが，この月の１日１隻あたりの漁獲量（CPUE）は271kg/隻/日で，６月としては1995年の260kg/隻/日を超える最高値であった。なお，月別のCPUEでは1986年５月の417kg/隻/日が過去最高になる。まき網による漁獲状況は６月25日に33.6トンとまとまった漁獲があった。

これらのことから2002年夏季の熊野灘海域におけるスルメイカの豊度は比較的高かったものと考えられた。

関連報文

・我が国周辺水域の漁業資源評価，水産庁増殖推進部
・中央ブロック卵・稚仔，プランクトン調査研究担当者・協議会研究報告№22，中央水産研究所
・長期漁海況予報（中央ブロック）No.118-120，中央水産研究所
・平成14年度漁海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集），三重県科学技術振興センター水産研究部(2003)